新しい学校は青少年の視点で

木村　元哉（きむら　もとや）さん
（広野中学校3年生（当時））

震災当日は、ちょうど自分自身の中学校の卒業式でした。祖母の家が広野町の駅前にあって、そこに友達といつも集まって遊んでいました。当日も、10人ほどと集まって、いつものとおり遊んでいたら、大きな地震が起こって、みんなと祖母を家の外に避難させて、祖母が通帳や印鑑を取りに戻るというのを引き戻して、揺れが収まったあとは祖母を友達に託して、中学校の方に避難させました。

商店街など近所の人が残っていると思ったので、私は駅前の辺りにとどまり、逃げてくださいと声をかけてまわりました。１年から２年たって、そのときに声をかけた人が実家にわざわざお礼を言いにきてくれて、涙ぐんで「あのときはありがとう」と言ってくれて、こちらまで涙ぐんでしまいました。

高校は、推薦入学で大熊町にある高校に決まっていましたが、部活動、修学旅行など、サテライト高の高校生活がどうなるか、その当時は分からなかったので、かなり悩んだ末いわき市内にある高校に編入しました。

高校時代は、双葉郡子供未来会議に参加しました。大人の目でなく、自分たち青少年の視点で双葉郡の学校はこのようなものであってほしい、こういう制度があったらいいという思いを、文科省や教育委員会に直接言いたかったからです。県立中高一貫校については、「給食をバイキングにしては」「温泉を作って住民も利用できるようにしたら中高一貫校が学校、住民、町をつなぐポイントになるのでは」という思いもよらぬ意見が出ました。

大学に進学して、広野町サマーフェスティバル実行委員を務めましたが、相手がどんな偉い人でも、みんな小さいころからお世話になっているおじさん、おばさんなので、物おじせず自分たちが楽しみたいという気持ちで、話し合いました。これからも、そうやって若い自分の考えを、古里の未来に反映させていきたいと考えています。

震災による町の変化に戸惑う

久賀（くが）　三枝子（みえこ）さん
（国道6号線を運転中に被災）

平成23年３月11日、最初の地震が来たときは富岡町で開かれた会議の帰り道で国道６号線を運転中でした。携帯電話には緊急地震速報は入りませんでした。突然の揺れで運転できる状況ではなかったので、道路の脇に車を止め揺れが収まるのを待ちました。運転できるくらいの揺れになったので、家に向かいました。途中、道路が陥没していて、車が落ちていたり、液状化していたりして、何度も方向を変え家にたどり着きました。家では地震が落ち着くまで外回りを片付け、ようやく入ると家の中はいろいろな物が倒れていて、足の踏み場もありませんでした。落ち着いてライフラインを確認すると、みな止まっていました。

13日、避難するよう告げる広野町からの防災無線に気づきました。姉弟からもすぐ来るようにメールが入りましたが、どこに逃げても同じと15日まで広野町にいました。どこのガソリンスタンドも長い列ができていました。15日、最終的に避難することを決め、本宮市にいる弟に迎えにきてもらい、途中、二本松市に立ち寄り線量を測って、初めて除染を経験しました。

本宮市には２か月ほどお世話になり、ガソリン券をいただいたりして週１回は広野町に通いました。震災後初めて広野町に車を取りに帰ったとき、玄関に猫が死んでいたのには大変ショックを受けました。埋めてやることもできず車庫に置いてきました。近所の人たちや友達の情報で家が荒らされることを知り、町に住む所をお願いしていましたがなかなか決まらず、友達の世話でいわき市にアパートを借りて週３回は家に帰り、家の片づけをしました。

その年の12月には広野町へ帰還しました。当初は町の人が少なく、除染の見知らぬ人をたくさん見かけるので、何となく夜は怖く電気を明るくつけることはできませんでした。生活において車を持たない高齢者は、町の中での生活は難しく感じました。

国道６号線の交通量の増加も普通じゃなく、朝晩の時間帯を考えて行動しないと生活していけないということも学びました。

今回の地震と津波については自然災害なので、それだけならもっと早く私たちは立ち直り、元の生活を取り戻すことができたと思います。しかし、目に見えず、人間の手で止めることのできない原発には、ノーと声を上げていきたいと思います。

肉眼で海の底が見えた

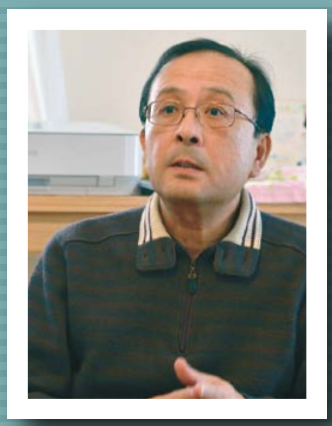
坂本（さかもと）　吉廣（よしひろ）さん
（自宅で被災）

平成23年３月11日は、たまたま妻が横浜市の孫のところに出かけていて、自宅でテレビを見ていた時に最初の地震がありました。大きなテレビはこたつ布団をかけて守りましたが、サイドボードにあった高級なウイスキーの瓶が飛び出して割れてしまいました。海の方が気になって国道沿いに浅見川へ行くと、肉眼で150メートルくらい先に海底が見えたのです。しけて跳ね返ってくると思ったら、大きな邸宅が地区ごと津波をかぶって見えなくなってしまいました。

坊田橋にある工業水道の揚水事務所が揚がってきて、浅見川伝いに流れてきて接近してきました。近くにある大谷内の堰（せき）まで行ったら、2メートルくらいある堰の残り30センチメートルくらいまで水が揚がってきて、もし超えたら自分の地区も浸水するところでした。翌日また海を見にいったら、航空母艦が来ていて甲板に戦闘機が並んでいました。上空を無人機が飛んでいました。消防団が警戒線を張りはじめていて、途中で止められました。

私はその日の防災無線に気づかず、夕方家にいたら、避難しない人の家を回る役場の車が来ました。すぐ逃げるように言われ、周りを見渡すと誰もいません。財布だけ持って移動すると、町のバスが4台と自家用車が何台か集まっていました。最初はいわき市好間の体育館を目指しましたが、避難所が人でいっぱいだったため平田村の体育館まで行くことになりました。平田村へは午後10時ころ着きましたが、そこもいっぱいで石川町の町民体育館へ行き、翌日の午前零時すぎに着きました。石川町では、本当によくしてもらい、食べ物は余るくらい用意してもらいました。

教訓としては、津波が来たときは、ポツンとした高台でなく、連携した高台に逃げるべきです。孤立すると救援物資も届きませんから。



夢を持ち続けてと、子どもたちに伝えたい

三瓶（さんぺい）　雅（まさる）さん
（広野小学校長（平成23年8月～平成25年3月））

私が広野小学校長に異動したのは、広野小学校がいわき市立中央台南小学校を間借りして再開した、平成23年８月です。授業は空き教室でできましたが、職員室がなくて困り、プレハブを建ててもらいました。学習発表会は広野小学校だけでやりましたが、運動会は中央台南小学校と合同で行い、子どもたちにとってもいい思い出が残ったと思います。いわき市で再開した直後は、慣れない道を徒歩で通う子とスクールバスで通う子がおり、安全確保に神経を使いました。両校の児童はすぐとけ込み、子どもの適応能力の高さに感心しました。

平成24年度の２学期から広野町の元の校舎に学校を戻したときも、子どもたちは特に抵抗感はなかったと思います。保護者説明会をして、元の校舎に戻る子と中央台南小学校に残る子に分かれました。さらに元の校舎に戻る子も、広野町に戻って通う子と、いわき市から通う子に分かれましたので、長い時間スクールバスで通う子たちが安全に学校に来られるか、それだけを心配しました。学校給食も再開し、約70人の児童全員と一緒になってランチルームで話をしながら食べられたのは大変よかったと思います。全校児童が300人を超えていた震災前ではかなわなかったことです。

私自身、帰還困難区域に家があり、広野小学校で36年間の教員生活を締めくくったあとも、避難した中通りに住むことになり、震災が生き方までも変えてしまいました。広野町の子どもたちには、夢を持って勉強してほしいと声をかけてあげたいです。諦めたり、努力をやめたりしてほしくない、そう願っています。

生涯の出会いに感謝

志賀（しが）　俊子（としこ）さん
（児童館前から避難）

東日本大震災直後は親せきの家などに避難しましたが、長くは身を寄せられないと思いインターネットで避難先を探しました。

高齢の父のためエレベーター付きの物件を探していると、島根県の松江市に住みやすそうな条件の部屋が運よく１室だけ空いており、遠方でしたが思い切って行ってみました。

島根に着いたその日には、布団、家電、調理道具、食器など生活に必要なものがそろえられていました。松江の皆さんの人柄を一言で表すと「ほどよい親切」です。震災に遭った私たち家族のことを厄介者扱いするわけでもなく、哀れむわけでもなく、ごく自然に受け入れてくれました。“ほどよい親切さ”が、当時の私たち家族にはとてもありがたかったのを覚えています。松江には２年間住みました。

ある日松江城の近くを散歩していた時、たまたま私が30年以上趣味にしている刺しゅうの先生と出会いました。先生と出会ってからは1日おきに先生の教室へ通い、時を忘れて刺しゅうに没頭し、先生と作品展も開きました。

平成25年３月、広野町へ戻ってきました。現在は町の公民館で友人と共に手芸教室を開き、先生に教えていただいた刺しゅうを教えています。

町に戻ってからもその先生とは連絡を取り合っています。きっかけは震災でしたが、貴重な出会いを得られたことに今は心から感謝しています。

町に元の賑わいを

鈴木（すずき）　すみ さん
（広野町復興プロジェクト実行委員長（平成24年7月～））

私は、東日本大震災前から居酒屋を開いていました。その店を平成23年８月に営業再開し、避難先のいわき市から通いました。まだ、広野町の緊急時避難準備区域が解除される前でしたが、帰町した人には娯楽も必要だと考えたからです。

再開して困ったのは、当時帰町していた町民は300人くらいしかいないこともあって、町のタクシーが最初動いていなかったことです。タクシーが営業を再開してからも、最初は午後８時までの営業でした。町には代行運転もないので、お客さんが来店する手段がなく、私が送迎をすることにしました。現在も送迎をしながら居酒屋をやっています。

なんとか町を元気にしたくて、平成24年６月に町民有志の会「広野町がんばっ会」を立ち上げ、主に子どもたちのためにボランティア活動を始めました。その翌月には、町民有志と若手の町職員で構成する「広野町復興プロジェクト実行委員会」の委員長も引き受け、町の復興イベントなどに協力しています。私も住民の代表として、広野町の復興についてのいろいろな意見を町に提案していますが、すぐに形になって見えるわけではありません。でも、少しずつ復興に向かっているという実感はあります。

私は、平成24年８月に子どもを連れて広野町に帰町しましたが、町に戻っているからこそできることもあると考えています。

広野町には、原発の収束に向けて頑張っている作業員の人たちがたくさん民宿や宿舎に泊まっていますが、まずは広野町の住民が帰ってきて、広野町をもっと賑やかにして元の広野町に戻れるようになってほしいなと思います。町が完全に復旧・復興するには時間がかかると思いますが、地道に頑張っていることを皆さんに知ってほしいと強く思います。

私は、生まれ育った広野町が大好きです。子どもたちにも「自分の古里は広野町だ」と誇れるような町づくりに関わっていきたいと思います。